

**[翻訳] エラスムス著『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』（翻訳・IV）**

その他のタイトル	[Translation] Declamatio de pueris ad virtutem ac literas liberaliter instituendis idque protinus a nativitate [504. A14. -509. F2.] Desiderius Erasmus
著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナー
巻	24
ページ	42-55
発行年	1992-12-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00019468">http://hdl.handle.net/10112/00019468</a>

エラスムス著『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生から  
すぐに行なう、ということについての主張』（翻訳・Ⅳ）

ロッテルダムのデジデリウス・エラスムスによる【翻訳：中 城 進】

それ故に、子供のことはしっかりとした充分な警戒がなされるべきです。まだ四歳になったばかりの子供がすぐに読み書きに関する学校に送り込まれるということがありますが、その場所においては無知で、粗野で、ごく僅かの思慮の徳しか有していない教師<sup>(1)</sup>によって管理が行なわれているのです。そのような者は、時々は見受けられるのですが、全く賢明さを有していない頭脳の輩でありますし、またしばしば見受けられることなのですが、乱心した輩であり、癲癇とか、あるいはフランス疥癬と公には呼ばれている癲病とかの罪深き病気の輩なのです。実際には、当今においては、彼等を卑俗で、無用で、無価値なものだとは誰も見做さないし、彼等を読み書きに関する学校で指導することに適した者ではないと考える人々は誰もおりません。なお加えて、彼等は自分の王国を手に入れることを考えているのです。また驚くべき事には、その王国の指揮権は凶暴に行使されるのですが、喜劇作家が述べるかのように、それは獣ではなく幼い子供たちに対して行使されるのです。当然の事として、その全ての幼い子供たちを柔和さをもって愛護しなくてはならないというのにです。「そこは、学校ではなく、拷問部屋なのだ」と言われております。その側においては、鞭の音の響きとか、鞭打ちの音の響きとか、泣き叫ぶ声やすすり泣きの声とか、嫌悪すべき彼等の脅かしの声しか聞こえて来ないのです。このことから“勉学は嫌悪すべきもの”ということをお子供が学ぶことはないでしょうか。その嫌悪が一度でも幼き精神に付着すれば、間違いもなく、人は成人した後にも勉学を

憎む行為を示すようになるのです。

また、更に愚かな事なのですが、ある人々は自分たちの息子を大酒飲みの婦人の下に読み書きの技能を獲得させるために送り込みます。女性が男性を指揮するということは、自然とは逆であることなのです。怒りが女性の精神をかき乱すこととなりますと、その性においては無慈悲というものしかありませんし、また容易に燃え上がりますし、その上に復讐に飽きるのでもない限りその怒りはすぐには鎮まることはありません。実際に、修道院や兄弟団——と自分たちをそう呼んでいるのですが——では、このこと<sup>(2)</sup>から利益を得ようと求めて、その隠れ家で未熟な幼き者を教えています。しかし、このような教育を行なう人々は、大概は不十分にしか教育されていないし、否むしろ誤って教育されているのですが、また貞潔で賢明であると認められることが殆ど出来ない者たちです。このような種類の教育に従って賛同をする方々がおられましても、例えば私が代理の者であるのでしたならば、自分たちの子供に惜しみなく教育を受けさせようと熱望している人には誰でもあっても決してそのようには勧めないでしょう。講義は、他に誰も子供がいない所で一人で受けるべきか、あるいは沢山の子供たちがいる中で受けるべきか、ということがあります。確かに、後者は節減的な事でもありますし、また一般的に行なわれていることでもあります。実際に、一人の者が一人の子供に惜しみなく教えることよりも、沢山の子供たちを一人の者が恐怖を用いてまとめることの方が容易と言えるでしょう。ところがしかし、ロバや牛を支配することは偉

大な事ではありません。子供に惜しみなく教育を行なうことは困難な事であり、また立派な事なのです。恐怖をもって臣民を支配することは暴君的で、そのようにではなく、好意や寛大さや英知によって支配することが王の義務というものです。ディオゲネスがアエジナ人<sup>(3)</sup>の捕虜となってしまう、競売にかけられた時のことです。彼は自分が買い手に対して推薦されたいと思う肩書を競売人によって尋ねられました。ディオゲネスは、「子供を支配することを知っている人間を買いたいと思っている人は誰ですか」と述べました<sup>(4)</sup>。多くの者がこの異常なる広告を大いに嘲りました。ある人が<sup>(5)</sup>、その人の家には幼い子供たちがいたのですが、公言された事が本当かどうかを知るためにこの哲学者の所に話をしに来ました。「もちろん、出来る」とディオゲネスは応えました。短い会話の後に、その人は“この男は普通の者ではなく、汚れた外套の下には非常に優れた英知が隠されている”ということに気付きました。その人は、買入れ契約を済まして自分の家に彼を連れて行き、そこで自分の子供たちの教育を彼に委ねたのでした<sup>(6)</sup>。

スコットランド人に次いでフランス人の文法の教師<sup>(7)</sup>よりも体罰を好む者は他にはおりません。それらの国のそのような者たちに注意の与え方に関しての非難を行ないましても、彼等はただ単に体罰を科する方法を改良するだけです。こういう種類の事はフリジア人たちにも言われていることです。この事が真実であるのかどうかということは、他の人の判断に任せることに致します。それぞれの国においてはそれぞれ多少の差異が認められるものですが、それでもやはりこの事は大概はその個人の本来の独自性にあるのです。鞭打ちによって改心する以前に死んでしまう者がおります。しかし、やさしい好意や忠告によってどのような望むべき方向

にも導かれる者もいるのです。ここで、私が子供であった頃の性質を告白しなければなりません。その時、いろいろなことに関して特別な愛情を私に示して注意を払っていた教師<sup>(8)</sup>がいました。私がそう思うのは、よくは知らない何かの大きな期待を私に対して抱いているということを彼が話していたからなのです。結局は、彼は鞭打ちに忍耐できるかということ私に対して試したいという欲望があり、思い出すことの出来ないような空想によってつくり上げた罪を叱責し、そして鞭打ちました。この出来事は、勉学への私の全ての愛情を拒絶することになりました。のみならず、子供の精神は破壊され、そればかりでなく殆ど死にそうになる位に悲嘆に暮れてしまって、疲れ果ててしまいました。とにかく、このような悲嘆のせいで、私は四日熱にかかりました。彼は、やっと自分が犯した誤りに気付き、彼の友人に遺憾を表明して、「彼の特性を理解するよりむしろ、彼をもう少しで滅ぼすところでした」と述べました。確かに、その人は愚鈍でもないし、無教養でもないし、また私が信ずる限りは邪悪でもありませんでした。彼は思慮を取り戻したのですが、しかし私に関しては遅過ぎました。私の素晴らしき読者よ、大いに恵まれた素質が無教養で、つまりそれは傲慢な見解の知識であるのですが、気難しくて、大酒飲みの、野獣のような刑吏<sup>(9)</sup>によって滅ぼされてしまうことを考えてみて下さい。彼等はただ単に自分の楽しみのためだけに鞭打つのですし、確かに彼等の本性は残酷なものであり、また他人の拷問から快楽を得ているのです。このような種類の人間は、屠殺者とか死刑執行者に適しているのですが、子供の形成者<sup>(10)</sup>には相応しくありません。

子供に何も教えない者こそが、最も子供を残酷に責めてズタズタに切り刻むのです。学校においては、体罰や罵倒を加えることなしに一日

を過ごすことが出来ないものでしょうか。私はある神学者を知っております。その人を私は個人的にもよく知っており、また最も傑出した評判を有する人です。しかしながら、その人の精神は生徒に対して自身の残忍さを満たしたことは決してありませんでしたし、またその上に熱心に鞭打ちを行なう指導員<sup>(11)</sup>を雇っておりました。“体罰は、本性としての強情さを打倒し、また若者の傲慢さを圧倒することに適している”という独特の考えを彼は持っていました。彼は、一群の生徒が喜劇を好ましい結果で終わらせなければ、決して会食をはじめませんでした。また、食べ物を食べた後には、一人か二人の生徒を鞭打ちで苦しめるために引きずり出していました。それから、彼は無実の生徒に対して虐待を行なったものでした。無論の事ですが、それは体罰に慣れさせるためでした。いつものように食事の後に一人の子供が呼び出された時のことでしたが、私は最も近くに位置してそこに立っておりました。私が思うには、その子供は十歳位でした。その上に、その子供は母親から離れてこの学校に来たばかりでした。彼は前もって、この子供の母親は最も信心深い女性であり、彼女がその息子の勉強を彼に委ねたことを話しました。その後、彼は、鞭打ちの機会を持つことを企むために、まだ知られていないその子供の強情さを暴き出そうとしました。しかし、その子供には少しもそのようなものが明白ではありませんでした。管理者の職<sup>(12)</sup>を役目としている同僚に彼は目配せして、このような輩は別名では追従者と言われるのですが、それから体罰がはじめられるのです。その男はすぐに子供を投げ倒し、その子供が冒瀆の行為を犯したかのように鞭打ちました。その神学者は、「もう充分だ、もう充分だ」と繰り返して、制止しようとしていました。しかし、その刑吏は、興奮して耳が聞こえない状態となっており、その

子供が殆ど気絶しそうになるまでその刑吏の仕事を続けました。それから、その神学者は私達の方を見て、「何の罪も犯してはいない。しかし、辱められなければならないのだ」と言いました。確かに、彼はこの表現を使用しました。このようなやり方で奴隷とか、あるいはロバとか、を教え込んだ人がかつていたのでしょうか。気高い馬は、皮の鞭とか拍車ととかよりも、賛意を示す舌打ちとか撫でさすることの方が良いのです。馬が荒々しく取り扱われるのでありましたなら、その馬は従順でなくなり、人間を蹴るようになり、咬むようになり、また後込みするようになるでしょう。突き棒でひどく無理やりに突き動かされている牛は、軛を振り払うようになるし、また突き棒を使う人を襲うようにもなります。気高き本性を持つ者は、ライオンの子が取り扱われるように、取り扱われるべきものなのです。象は、暴力によるのではなく、ただ術によるのみにて飼い馴らされることが出来るのです。優しさで飼い馴らされることがない獰猛な被造物はいません。過度の苛酷さに憤激をせず、飼い馴らされるような被造物はおりません。痛みの恐怖によって飼い馴らすことは奴隷的です。そして、私達の公の慣習によりますと、私達は息子たちを『子供たち (liberi)』<sup>(13)</sup>と呼びます。というのは、彼等には自由なる教育が相応しいからですし、奴隷的なものとは随分と異なっているからなのです。それに、賢明なる人は、どちらかと言いますと、穏やかで好意をもって奴隷を取り扱いますし、奴隷の頭髪を切り取りますし<sup>(14)</sup>、奴隷を獣ではなく人間として記憶しているのです。

主人に対する奴隷の驚くべき程の例を思い起こさせられます。しかし、もしも主人が鞭打ちで屈従させるならば、その主人はそのような良き事を受け取ることはないでしょう。矯正できる素質の奴隷であるのであれば、殴打より

も、注意や恥や義務の方が良く矯正されることになります。もしも奴隷が矯正できない素質がありましたならば、その奴隷の悪意は最たるものとして固まっており、その奴隷は脱走することによって所有者を略奪し、またその奴隷は何等かの方法で主人を殺害することを企みます。時には、奴隷はその生命を犠牲にして主人の残忍さに報復します。また、その上に、人間よりも恐るべき生き物は他にはいないのです。それは、苛酷なまでの侮辱を与えられて、それがその人間の人生を軽蔑したもとして味わわれた人間であるならば、と言うことです。それ故に、「奴隷の数と同じだけの多くの敵を人は持っている」という、一般に流布している格言があります。もしもこのことが本当に真実であるのであれば、それは主として主人の側の不当な行為にその原因が帰せられるように私には思われます。実際、奴隷を統率する事は、幸運な事ではなくて、術であるのです。賢明な所有者が、惜しみなく奉仕してくれる奴隷、あるいは奴隷の代わりにむしろ自由なる者、を保有するための苦勞を惜しまないというのでありましたならば、その自然が自由に造られている者を教育によって奴隷にしてしまうということは何と不調和なことではないでしょうか。喜劇の中の、ある年寄は父親と主人との間には大きな違いがあるということを信じていました。主人は多くの事を強要するのだが、父親は、息子に恐怖を遠ざけてむしろ恥や高潔さとかに親しませることで、父親が不在である時でさえも子供をしっかりと統率することが出来るようになるし、そしてこのように行為できない者は子供を統率することが出来ないということを彼自らが認めることである、ということとその年寄は述べております。父親と主人との間には君主と暴君との間にある違いよりも更に大きな違いがあるべきものなのです。私達は国から暴君を追放

します。しかしながら、私達は暴君に息子を託したり、あるいはまた私達自身が息子の暴君として振舞います。その一方で、“取るに足りない奴隷の身分”という言葉をキリスト教の精神から主として来たものとするのは至極当然の事とも言えます。天国に今は在られる聖パウロは、オネシムス<sup>(15)</sup>をもはや奴隷としてではなく、奴隷以上の者、つまり愛する兄弟としてピレモン<sup>(16)</sup>に委ねました<sup>(17)</sup>。また、聖パウロはエペソ人<sup>(18)</sup>に手紙を書き、奴隷に対して苛酷な事や脅迫する事を行なうことについて、奴隷の所有者たちを戒めましたし、また彼等自身も主人というよりもむしろ奴隷仲間であるということに彼等に思い起こさせもしました<sup>(19)</sup>。つまり、両方共に共通の御主人を天にもっており、その御主人は人が罪を犯した時には奴隷よりも主人の方をより少なく罰するという事はしないのです。使徒は、主人が脅かしたり、更に殴打を好んだりすることを欲しなかったのです。すなわち、彼は、「鞭を差し控える」と言ったのではなく、「脅かすことを差し控える」と言ったのです。それは、私達の子供たちがただ単に鞭打ちの愛好に晒されているということに他ならないことなのです。三段襪船とか海賊とかの指揮者<sup>(20)</sup>が漕ぎ手を尊重することは殆どあり得ません。しかし、使徒<sup>(21)</sup>が子供に関して教えている事とは一体どんなことなのでしょう。彼は、奴隷のように子供たちを虐待することを望んでもいかなかったし、それにまた警告を与える時とか叱責を与える時には残忍さや苦痛をもって行なうべきではないということに命じていたのです。使徒は、「父たちよ、あなたがたも、子供を怒らせないうで、主の規律と訓戒とによって彼等を育てなさい」<sup>(22)</sup>と言いました。しかし、この“主の規律”とは何を意味するのかと云うことなのですが、それは穏やかさや温良さや愛情に意を用いる人には容易

に理解されることなのです。つまり、それらのことは<sup>(23)</sup>、主イエスが彼の弟子たちに少しずつ教え、説き、愛護し、促したもののなのです。

人間の法律は父親の権利に制限を設けているし、また同様に使用人たちにも主人の虐待に対する訴訟が許されております。それでは、何故にキリスト教徒の間においてこのような野蛮なことがあるのでしょうか。かつて、ローマの騎士階層のアクソン<sup>(24)</sup>がその息子に自制することなく鞭打ちの体刑を科して、そして殺してしまいました。この事に対して民衆は非常に怒って、広場に彼を引きずり出しました。騎士階層の身分を畏敬することなく、またオクタウィウス・アウグストゥス帝<sup>(25)</sup>が非常に骨を折って彼を救い出そうと試みたのですが、親たちや子供たちが短剣で彼を刺し殺してしまいました。いかに多くのアクソンが今日においては見られることでしょうか。彼等は、残忍な殴打で子供の健康を損ね、目を潰し、身体に治らぬ損傷を与え、そして時には殺害もするのです。鞭打ちに対して残忍さを満たしていない人々がおりまして、彼等は幼い子供を鞭の柄で打ったり、平手打ちとか拳で殴り付けるし、また手近にあるものは何でもつかんでそれで殴り付けるのです。法律家の記録が示すところによりますと、ある靴製造人が彼の靴製造の徒弟の頭部を靴型で打って片方の目を潰しましたが、この行為に対しては法律によって懲罰が彼に与えられました。嫌悪すべき暴行という拷問を加える人々に対して、私達は何を言えば良いのでしょうか。

その子供たちや残忍な行為者を私が非常によく知っているというのでなければ、私は次に述べる話を決して信ずることが出来ません。その子供はたった十二歳でしたし、またその子供の親は教師<sup>(26)</sup>から最も誉められるべき人として大いに価値のある人でした。しかし、その子供

が取り扱われた恐るべき程のやり方は、もう殆どメゼンティウス<sup>(27)</sup>とかファラリス<sup>(28)</sup>とかのような者だけが行ない得る、というような残酷なやり方なのです。人間の排泄物がその幼い子供の口の中に無理やりたくさん押し込まれてしまい、その子供はそれを吐き出すことが出来なくされてしまったので、その殆どを飲み込むことを強いられたのです。かつての暴君でも、このような種類の虐待を行なったことがあるのでしょうか。「食事の後の命令」というギリシアの諺<sup>(29)</sup>があります。つまり、“このような種類の食事の後に命令を行使する”ということです。その子供は裸にされて、腋の下を通した綱によって宙に吊り上げられました。これは、何とも嫌なことなのですが、盗人の拷問を意味しており、またゲルマン人の間において行なわれている嫌悪すべきやり方に他なりません。次いで、吊り上げられている子供は殆ど殺されるというところまで残酷にあらゆる方向から鞭打たれるのです。無論の事ですが、罪を犯していないことを子供がはっきりと否定してしまうことにもなりますと、更にひどい拷問でその子供は責め立てられることになるのです。実際に、あなた自身に拷問者<sup>(30)</sup>を見る機会が与えられたのでしたなら、恐ろしい形相をして行なわれている拷問をあなたは見ることになるでしょう。蛇のような眼、薄く皺が寄った口、死霊のものと思われる程の鋭く響く声、色褪せた顔、発作的に癖で動かす頭、脅しや罵言雑言。このように、彼等は、激しい乱心をもたらされて、復讐を行なうティシポネ<sup>(31)</sup>のように思われることでしょうか。その子供が被った結果を想像することが出来るのでしょうか。その子供は拷問の後すぐに病気にかかり、精神も生命も大きな危機に陥りました。その時、刑吏<sup>(32)</sup>は、自分への抗議に対して自ら先手を打って出て、“出来るだけ早く子供を引き取りに来られること、全ての

治療を施したが無益に終わってしまい子供は悲しむべき状態に陥っていること”という手紙をその子供の父親に書きました。身体の病気から脱した時でさえも、依然として精神は同じ状態であって無感覚のままでしたので、それ故に私達はその子供が以前のような精神の活力を取り戻すことがもう決して出来ないのではないかと恐れておりました。このような残忍な出来事は特別な日のことではありません。幼い子供が彼等<sup>(33)</sup>と生活する限り、無事に過ごせる日は決してなく、一度ならずも何度となく残忍なまでに殴られるのです。そんな野蛮な人間に、矯正することを委ねるといふ大変な企てに対して、読者は既に疑念をお持ちのことだと私は思っております。簡潔に説明を致したいと思えます。判明になったことですが、鞭打ちを被った子供と他の二人の子供たちの書籍はインキで汚され、衣服は引き裂かれ、そして半長靴は人間の排泄物で汚されていました。この悪戯を行なった者は、生来の全くの悪漢である子供であり、後に他の悪行の主犯であるとも判断された者であり、また彼は乱心した教師<sup>(34)</sup>の女性のきょうだい<sup>(35)</sup>の方の甥でした。この時には、彼は、既に戦闘や略奪行為の兵士として習熟しておりまして、それらのことの予行をしていたのです。例えば、彼は、ある他の家に招かれた時にその家のワイン樽から栓を引き抜いてブドウ酒を床に流れ落としておいて、“私にはブドウ酒の匂いがする”などと誠実な振りをして告げ知らせるのでした。また、彼は他の仲間の子供と共に毎日のように剣で戦っておりました。これは、戯れではなく、真剣なものでした。彼の将来には追剥ぎとか暗殺者とか、非常に同様なものなのですが金銭で雇われた兵士とかが認められておりました。形成者<sup>(36)</sup>は好意をもって彼等を見守っていたのですが、それでも子供たちがお互いに刺し殺し合いをしないかと恐れておりました。

たので、近親者の下へと送り返しました。彼は、他の者から沢山の儲けということに魅せられておりましたので、“金よりも魅力的なものは他にはない”という種類の福音主義の集団に入ることになりました。その父親は、最も良き人間でありましたが、注意深い人である教師<sup>(37)</sup>と共に子供が過ごしていると思いついておりました。ところが、子供は偽の刑事<sup>(38)</sup>と共に暮らしており、半ば乱心し、不治の病気にかかった人間の僕としてまた助手として過ごしていたのです。要するに、近親の子供とか沢山の収穫をもたらす子供とかは特別に扱われましたので、潔白である子供に疑惑が投げかけられてしまうようになり、その子供の方にそのような意地悪の責任が転嫁されることになってしまったのです。また、彼等は、彼等自身に降り懸かる疑惑から身をかわすために、彼等自身の衣服を引き裂いて、汚してしまったのです。実際には潔白であった子供は、両親ともに最良の出生であってその両親の子供でありますし、そのような酷い素質を有しているという証拠は全く見つけられませんでした。また、今日においても、その子供の性格は全ての悪意とは全く関わりを持たないものです。その人は、今は全ての恐怖から解き放たれて、全ての事柄がどのように起こるかということを順序よく話をすることが出来ております。

このような教師<sup>(39)</sup>に、品位のある市民が最も貴重なものである自分たちの子供を引き渡しているのです。このような連中は、自分の働きに対して然るべき報酬が自分たちに支払われてはいない、と不平を言うのです。私は刑事<sup>(40)</sup>が犯した過ちについて意見を述べて来たのですが、しかし彼等が犯した罪を認めることよりもむしろ彼等が乱心していることについてしっかりと意見を述べた方が良いように思います。不幸なことに、このような種類の人間は悪しき取

扱についての訴訟を受けることはありません。また、恐るべき程の残忍さに対して効力のある厳格な法律もありません。癩癩を患っている人々のように、怒りは非常に静まり難いものです。フリジア人やスキタイ人<sup>(41)</sup>も欲しなかった非常に多くの事柄がキリスト教徒の生活の中に忍び入っております。私の議論を脇道に逸らすことなく、それらの中から一つだけ告発を致します。公の学校に入学したばかりの子供は無理やりに“痛め付け”<sup>(42)</sup>がなされることになるのですが、野蛮な事柄には野蛮な名前が似つかわしいように思われます。自由人たるべき学芸を学ぶために、良き素質を有する若者が送り込まれて来ます。本当に、何と多くの卑劣な暴行が執り行なわれているというのでしょうか。最初には、顎髭を剃るかのように新入生の顎に小便かあるいは汚れた何かの水のようなものが擦り付けられて苦しめられます。それからその液状のものを口に流し込まれて、吐き出すことを出来なくさせられるのです。嫌悪すべき襲撃で角が折られるのです<sup>(43)</sup>。無論の事ですが、時には大量の酢とか塩とかを、あるいは若者の節制のない破廉恥さを満たしそうなものを、無理やりに飲み下させてしまうのです。勿論、戯れの下に襲いかかる前に、その子供に絶対的な服従の誓約を求めることを目論みます。それから遂に、子供は高く抱き上げられて、その背中を戸口の側柱に向けたままで何度も突進されて、背中を打付けられることになるのです。このような野蛮な暴行は、時には発熱を引き起こしたり、また脊柱に不治の痛みをつくることとなります。当然のように、この愚昧なる戯れは酩酊した宴会となって終わるのです。このような開始によって、自由人たるべき学芸の研究が吉兆をもって始められているのです。実際には、このような始め方は、刑吏<sup>(44)</sup>や拷問者<sup>(45)</sup>とか、売春仲介者とか、カリヤ人の奴隸とか、漕ぎ手

とか、ムーサ<sup>(46)</sup>やグラティアエに捧げられることに決められた子供に相応しい始まり方なのです。自由人たる研究に委ねられている若者がそのような乱心した流儀で振舞うということは驚嘆すべきことですし、またそれ以上に若者たちがこのような乱心した流儀を行なうことを管理者<sup>(47)</sup>が是認していることも驚嘆すべきことなのです。このような嫌悪すべき残酷な悪戯は慣習という名で包み隠されております。悪しき慣習という事柄は根付いた誤りのようなものです。このようなものがやがてより広範囲にまで徐々に広がるものでしたなら、熱を入れてそれらを<sup>(48)</sup>剥ぎ取るべきでしょう。神学者の間においては、晩課の習慣はしっかりと守られております。確かに、愚かな事柄は愚かな名を付けられております。また、その習慣は神学者というよりもどちらかと言うと道化師に似つかわしいように思われます。本当に、自由人たるべき教養を公に職とする者たちは戯れにおいても自由人たるべきであらねばなりません。

子供のことに話を戻しますが、鞭打ちに慣れることほど子供に有害なものは他にはありません。過度に鞭打ちが行なわれるのなら、才能のある子供は取扱い難くなるし、絶望に追い込まれて無気力になります。また、過度の鞭打ちを絶えず頻繁に行ないましたなら、身体は鞭打ちに対して無感覚になるし、それにまた精神は言葉に対しても無感覚になるのです。辛辣な叱責が頻繁に行なわれることも却って良くはありません。薬の悪い使用は、軽減することなく、病気を悪化させます。また、薬の不断の使用は、少しずつ薬の力を無力化していきますし、またまずくて少しも健康に良くないというだけの食べ物になるだけです。この事について、私達にある人はヘブライの格言を叫び立てます。「鞭を惜しむ者は息子を憎む者である。しかし、息子を愛する者は鞭でもって息子を監視します」

(49)。更に、「息子が若い間は首根っこを押さえ、また息子が幼い時には横腹を打ちなさい」。このような懲戒は恐らくはかつてのユダヤ人たちに合致したものでしょう。しかし、今日においては、ヘブライの警句はもっと広い意味において解釈されなければなりません。もしも私達が文字と音節の通りに熱心に行なおうとするならば、子供の首根っこを押さえ付けたり、また幼児の横腹を打つということだけでしかない愚かな事を行なうこととなります。鋤のために雄牛が、また荷鞍のためにロバが、ましてや良習のために人間が教育されるというようなことをあなたは考えるでしょうか。しかし、私達に約束されている特典は一体何なのでしょう。「隣人の扉にへつらわない」と言っております。息子が貧困になることを最も危険な悪であるかのように人は恐れます。この事は何と冷淡な見解ではないでしょうか。私達の鞭は自由人たるべき警告であるべきです。時々叱責が必要ですが、しかし叱責の言葉は薬味を混ぜた温良なものであるべきであって、侮辱的なものであってはいけません。このような鞭で私達の息子たちを熱心に監視しますと、正しい教育が行なわれて、子供は分別ある良き生活を家庭で過ごすこととなり、行なうべき事柄において近隣の人々に助言を乞わなければならないということにはならないでしょう。哲学者のリュコン<sup>(50)</sup>は、子供の素質を覚醒させるという、二つの熱烈なる刺激について述べたのですが<sup>(51)</sup>、それらは恥辱と称賛です。恥辱は公正なる非難を恐れることであり、それに対して称賛は全ての知識の乳母なのです。このような刺激は子供たちの素質を駆り立てるものなのです。それでも、どうしても棍棒であなただけの息子の横腹を打ちたいという人々に説明を致したいと思います。「一徹な苦勞は全てを打ち負かす」<sup>(52)</sup>と最高の詩人<sup>(53)</sup>が述べました。つまり、注意を払い、

駆り立て、促すことです。要求し、更に要求し、厳命することです。この事が棍棒で子供の横腹を打つということなのです。人は第一に正直さと勉学とを愛し崇敬することを学び、卑劣さと無知とを恐れるようにならなければなりません。ある人がその正しい行為において誉め称えられることや、またある人がその悪しき行為において非難されることを人は聞くべきです。つまり、学識によって、大きな榮譽や財産や地位や権威を獲得している模範を見せられなければなりません。逆に、悪しき習慣を有する人々や、知識によって才能を高めることは決して行なわないで悪評や軽蔑や貧窮や腐敗を有する人々からも学ばなければなりません。無論の事ですが、これが、温良なイエスの教え子である、キリスト教徒に相応しい棍棒なのです。

訓戒も懇願も競争も恥辱も称賛も、しかもなお他の方法までもが全く役立たねば、そして更に鞭打ちの懲罰という最後の手段が必要とされるような場合におきましても、その懲罰は寛大で控え目に行なわれなければなりません。無論の事ですが、この事のためだけに自由民の身体を裸に脱がせるということは、特に多くの人の眼前では、侮辱となるのです。ファヴィウス<sup>(54)</sup>は、一般論として、自由民の子供を打つという慣習の取り入れを拒否しております<sup>(55)</sup>。ある人々は、「殴打されることなしには、勉学の方へと駆り立てられることが出来ない子供には何をすべきでしょうか」と述べます。私は即座に、「もしも学校にロバや牛がやって来たらどうしますか。田野に送り返して、ある動物は粉引き場へと送り、またある動物には鋤を付けさせませんか。実際、鋤の柄や粉引きの性質を持つ人間も少なからず居るのです」と応答します。「しかし、それでは、多くの生徒が減ることになります」と彼等は言います。「それは何のことですか」と私は尋ねます。「同時

に、儲けも減ることになります」と彼等は言います。「その事は、由々しきことです。それ故に、その事で悲しむ人々もいます。彼等には、金儲けは子供の成長よりも貴重なことなのです。しかし、一般の文法の教師<sup>(56)</sup>は殆どそのように考えているのです」と私は応えます。

いつも思う事ですが、哲学者は賢人を論じ、修辞学者は弁論家を論ずるのですが、そのような者はいかなる場所においても捜し出すことは殆ど出来ないものなのです。従って、理想として描いたものに該当する人間を熱心に捜し出そうとすることよりも、教師<sup>(57)</sup>としてあるべきことを規定することの方が遙かに容易です。しかし、この事は、公的なことであるべきものとされて、世俗の官吏と教会の高位の方の管理に委ねられておりました。彼等は、戦争に奉仕する人間を、また礼拝で聖歌を歌う人間を教育して来ました。そのような具合に、正しくまた惜しみなく市民の子供たちを形成する人を更に数多く教育するべきでしょう。ヴェスパシアヌス帝<sup>(58)</sup>は、百年間、ラテン語やギリシア語の修辞学教師<sup>(59)</sup>にご自分の金庫から金をお支払いになりました。また、プリニウスの甥は自分の個人財産から同じ使用目的でもって莫大な金を支払いました。もしも公の管理が差し控えられた場合におきましては、勿論の事ですが、それぞれの各家族でこの義務を遂行しなければなりません。

「自分の子供たちを辛うじてやっと教育できるという者とか、またそのように優れた教育者<sup>(60)</sup>を雇うことが出来ない者は、どうすればよいのでしょうか」ということをあなたはお尋ねになるでしょう。この事につきましては、『出来ることを成せ、欲することを行なえないなら』<sup>(61)</sup>という喜劇からの言葉でしか私はお答え出来ません。私達は最良の学習の方法を伝えることが出来るのですが、境遇を与える事は出

来ません。この事は別に致しましても、裕福なる者は素質を有する者に対して十分に寛大でなければなりませんし、また援助も行なわなければなりません。貧困の世帯では、彼等は生来の能力をしっかりと駆り立てることが出来ないのです。

いつも思う事ですが、教師<sup>(62)</sup>は愛想の良さを適度に節制しなければなりません。愛想の良い親交のせいで軽蔑されることになって、慎み深さや畏敬を切り落とすようなことがあってはいけません。このような事に関して、ウティカのカトーのパイダゴゴス<sup>(63)</sup>のサルペドンのことが公に知られております。彼は、全く鞭打ちの脅しを用いないで、親切さで溢れる好意を、そして誠実さをもって全幅の信頼を、彼のその子供から獲得をしたのです。しかし、皇帝や王侯の御子息の方々のような、誰もが鞭打つことを決して欲しない御方を委ねられて教育を行なう場合には、鞭打つことは正当な事ではないと言えるのではないのでしょうか。支配者の御子息の方々は規則によって鞭打ちが免ぜられている、と言う人々もおります。どういうことなのでしょう。市民の子供たちは王侯の子供たちよりもより劣った人間なのでしょう。市民のそれぞれの子供も、また同様に王侯の御子息も、等しく貴重なるべきものではないのでしょうか。境遇が低きものであるでしたならば、低き所から自分を高めるためには、より多くの教授や学識の手助けが必要とされます。しかし、裕福な者におきましても、管理を正しく行なうことのために哲学は必要とされております。ほんの僅かですが低き地位から帝位へと、また時に頂点たる教皇の地位へと昇官なされた御方々がおられます。全ての者がそのような地位へと昇ることにはなりません。しかしながら、全ての者がそのようなものへと向かって教育されるべきです。

体罰を好む専制者<sup>(64)</sup>のことについての話は、もう止めることに致します。しかしながら、この事についてもう一つのことを一つだけ付け加えておきたいと思います。それは、賢明なる人々によって非難されて来た法律や行政のことです。そのような法律や行政は、ひどい懲罰で脅して犯罪を止めさせるものですが、その恩典によって引き付けられるような法律や行政ではないのです。また、そのような法律や行政は、罪を犯した人を処罰するものですが、同じく人が罪を犯してしまうようなことに対して用心を行なわないような法律や行政なのです。同様に、生徒の反抗に対して鞭打つばかりで、生徒の精神を教化せずに躓くことを欲している多くの教師<sup>(65)</sup>たちにも私達は意見を述べなくてはなりません。子供が朗読を行なうところを想像してみてください。その時にもしも子供が誤りを犯しましたなら、子供は鞭打たれることになります。この事が毎日毎日と繰り返される場合には、それによって小児<sup>(66)</sup>は罪を受けることによく慣れてしまうでしょうし、また彼は教師<sup>(67)</sup>の義務を立派に果たしたと思込むことにもなります。このような事とは反対に、むしろ子供に手解きをすることであって、それは、勉学を好むようにさせたり、形成者<sup>(68)</sup>の感情を害することを気遣わせたりすることなのです。本当に、この事柄に関しましては、多分、充分すぎる程に何処かで論述して来たように思います。このような虐待が殆どのあらゆる所で非常に激しく行なわれていることはないというのでしたら、虐待については決して充分に述べるのが出来なかったであろうと正当に思われるのです。もしも子供の教育に従事する人が父の情愛という精神の誘い<sup>(69)</sup>を採用することになりますと、非常に良い援助をもたらすことになるでしょう。このような方法で行なえば、子供は喜んで学習を行なうことになるでしょうし、また

子供自身が勉学の不快な辛苦に対してはほんの少し気付くだけとなるのです。無論の事ですが、大概是、愛は全ての苦労や困難を乗り越えて行きます。それにまた、『類は類を好む』<sup>(70)</sup>という古き諺に従って考えますと、子供たちに愛されるためには、教師<sup>(71)</sup>はある程度は再び子供になるべきです。それにも拘らず、老人や殆ど老人と言ってよい者に子供たちを委ねて、読み書きの初歩を習熟させることは良いことではありません。というのは、彼等は実際その通りに子供であるのです。振りをしているのではなく、また口ごもりを偽って行なっているのではなく、実際その通りに彼等は口ごもっているのです。子供が嫌がるような人ではなく、またどのようなペルソナをも受け入れることを厭わないような若々しい年代の人を私は選びます。親とか養育者<sup>(72)</sup>とかが身体の形成において行なっていることと同様なやり方で、人間の本性を形成し導いて行くのです。子供が最初に人間の声を発することを、どのようにして教えるのでしょうか。子供らしく口ごもる言葉に、口ごもる舌で話すような言葉を合わせるようにするのは、どのようにして、食べることを教えるのでしょうか。予め既に咀嚼された粥を子供の口に含ませてから食べさせるのです。どのようにして、歩くことを教えるのでしょうか。身体を屈めて、自身の歩調を子供の歩調に狭めます。子供は、どのような食べ物でも食べられるということはありせんし、またおなかに容れることが出来る以上の食べ物も食べられません。また、年齢が増えると共に、徐々に堅い食べ物が食べられるようになります。最初は、滋養に近いものが必要とされております。それは殆ど乳に近いものです。しかしながら、それを口の中を含ませ過ぎますと、子供を窒息させることにもなりますし、また口から溢れ出て衣服を汚すことにもなるのです。徐々にゆっくりと食べさせる

と、子供は喜ぶのです。口の狭い小さな容器を使用する時におきましても、このような事が見られます<sup>(73)</sup>。もしも多量に注ぎ込みますと、注いだ水は容器に入らずに流れ去ってしまいます。しかし、もしも少しずつ、言うなれば一滴ずつというように、ゆっくりと徐々に注ぎ込みますと、容器を満たすことになります。要するに、食べ物を少しずつ繰り返して与えられて幼い身体は養育される、というのです。同様に、子供の本性も知識<sup>(74)</sup>と類似したもので養育されるのです。しかし、それらは徐々にまたあたかも遊び戯れのように伝えられるのですし、それにまたそれらの重要性は次第に親しまれるようになるのです。この最中には、疲労を感じさせられることはありません。少しずつ疲労が増えて行くので、辛苦の感覚を感じられないようにさせられているのです。それにも拘らず、大きな成功がもたらされるのです。この事は、ある競技者<sup>(75)</sup>の事として語られているようなことです。その競技者は毎日、数スタディウム<sup>(76)</sup>を、子牛を持ち上げて運ぶことを通例としておりました。やがて子牛が雄牛になった時にも、その競技者は苦勞なしにその牛を持ち上げて運びました<sup>(77)</sup>。というのは、一日一日に付け加わる負荷の増加が感じられないものであったからです。しかしながら、子供の年齢を考慮に入れずに、また子供のそれぞれの力に従って子供の素質を判断もしないで、子供が直ちに成人になることを要求する人がいます。そのような人々は、子供に絶えず無情な圧迫を行ないますし、また絶えず沢山の働きを求めますし、それにまた子供が彼等の期待にあまり応えないようでありましたなら絶えず眉間の間の皺を寄せるのです。それは、あたかも大人に対する振舞ごとのようであり、“彼等は自身が子供であったことを忘却しているように思われる”ということが出来るでしょう。プリニウスがある苛酷

な文法の教師<sup>(78)</sup>に忠告したことは非常に人間的なことです。彼は、「想い出さない。彼等が若いことを、そしてあなたがかつて若かったことを」と言いました。しかし、大多数は無力な幼き者たちに対して非常に狂暴であり、自分自身やそれに生徒たちもが人間であることを想い出さないかのようです。

#### 【註釈】

- (1) 「praeceptor」を「教師」と訳した。  
この〔翻訳Ⅳ〕においては教師に焦点が当たっているので、教師を意味する用語には註釈を入れることにした。
- (2) 「このこと」とは、教育あるいは学校教育ということを指している。
- (3) アエジーナ [Aegina] 人とは、アッティカ [Attica] 付近の一島の住民のこと。
- (4) ディオゲネス・ラエルティオス、加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝(中)』、岩波文庫、1989年。第六巻・第二章・二九を参照。
- (5) 「ある人」とは、上記引用の書によると、クセニアデスである。
- (6) ディオゲネスの教育は、上記引用の書(6. 2. 29~31)を参照のこと。
- (7) 「literator」を「文法の教師」と訳した。
- (8) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (9) 「carnifex」を「刑吏」と訳した。
- (10) 「formator」を「形成者」と訳した。
- (11) 「magister」を「指導員」と訳した。
- (12) 「praefectura」を「管理者の職」と訳した。
- (13) 『子供たち (liberi)』とは、自由人の子供たちということの意味している。
- (14) 古代ローマ時代には、若い奴隷は奴隷の印として頭髮を長く伸ばさせられていた。

- (15) Onesimus.
- (16) Philemon.
- (17) 聖書、『ピレモンへの手紙』を参照。
- (18) Ephesus.
- (19) 聖書、『エペソ人への手紙』(6. 9)を参照。
- (20) 「praefectus」を「指揮者」と訳した。
- (21) 聖パウロのことを指している。
- (22) 前掲書、『エペソ人への手紙』(6. 4)を参照。
- (23) 「それらのことは」とは、イエスが説いたといわれる、穏やかさ (lenitas) や温良さ (mansuetudo) や愛情 (caritas) ということを意味している。
- (24) Auxon.
- (25) アウグスツース [Augustus : 前63年～後14年] 帝は、初代ローマ皇帝 [在位前27年～後14年] であり、幼名はオクタウィウスという。
- (26) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (27) メーゼンティウス [Mezentius] は、イタリア西岸地方のエルトリアの王であり、トロイアの英雄アエネーアースに殺された。『アエネーイス』(VII. 648)を参照。ウェルギリウス、泉井久之助 (訳)、『アエネーイス』(上)、岩波文庫、1991年。
- (28) ファラリス [Phalaris: 前670年～前594年] は、シシリーの Agrigentum の専制君主であり、残忍な王であることで知られていた。
- (29) 『オデュッセイアー』(I. 124)を参照。ホメーロス、呉茂一 (訳)、『オデュッセイアー』(上) 岩波文庫、1971年。
- (30) 「tortor」を「拷問者」と訳した。
- (31) Tisiphone は復讐の女神の一人である。
- (32) 「carnifex」を「刑吏」と訳した。
- (33) 学校教師のことを意味している。
- (34) 「doctor」を「教師」と訳した。
- (35) 「soror」を、その関係が“姉弟”か“兄妹”かがこの文章上ではわからなかったので、「女性のきょうだい」と訳した。
- (36) 「formator」を「形成者」と訳した。
- (37) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (38) 「carnifex」を「刑吏」と訳した。
- (39) 「paedagogus」を「教師」と訳した。
- (40) 「carnifex」を「刑吏」と訳した。
- (41) スキタイ [Scythae] 人とは、黒海沿岸周辺に住んでいた人々のこと。
- (42) 「beanum exuere」は“青二才の皮を剥ぐ”という意味があるので、ここでは「痛め付け」と訳した。
- (43) 卑劣な暴行を被った子供が、市民あるいは自由人としての尊厳を喪失してしまうことを意味している。つまり、その子供は、暴行者の所属する集団内の優劣の序列の中に組み込まれ、その非合理的な序列社会に服従してしまうことを意味している。
- (44) 「carnifex」を「刑吏」と訳した。
- (45) 「tortor」を「拷問者」と訳した。
- (46) ムーサ [Musa] は、ゼウスとティタン族のムネモシュネとの間に生まれた娘の一人であり、芸術の女神の一人である。
- (47) 「moderator」を「管理者」と訳した。
- (48) 「それら」とは“慣習という名”を指している。
- (49) 旧約聖書、箴言 (13. 24) を参照。
- (50) リュコン [前229年～前225年] は、トロイア地方のアステュアナクスの子である。また、ペリパトス派のギリシアの哲学者であり、ストラトンの後継者となった。
- (51) ディオゲネス・ラエルティオス、『ギリシア哲学者列伝 (中)』、(V. 4. 65)。
- (52) Publius Vergilius Maro, Georgics. (I. 145)。

- (53) ヴェルギリウス [Publius Vergilius Maro : 前70年～前19年] のことを指示。
- (54) ファヴィウス [Fabius] とは、古代ローマの修辞学の学者である、クインティリアヌスのことである。
- (55) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 3. 14)を参照。
- (56) 「literator」を「文法の教師」と訳した。
- (57) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (58) ヴェスパシアヌス帝 [Titus Flavius Vespasianus : 9年～79年] は、庶民出身のローマ皇帝 [存位69年～79年] であり、ローマ帝国の平和と繁栄に取り組んだ。
- (59) 「rhetor」を「修辞学教師」と訳した。
- (60) 「educator」を「教育者」と訳した。
- (61) 「ut possumus, quando ut volumus non licet」. テレンティウスのアンドリア (Andria, IV, V. 806) には、「諺にありますように『望むようにならない時には出来るだけ』やるまでですよ」(鈴木一郎訳、古代ローマ喜劇全集5・テレンティウス、東京大学出版会、1979年、76ページ) とある。
- (62) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (63) 「paedagogus」を「パイダゴゴス」と訳した。
- (64) 「rex」を「専制者」と訳した。
- (65) 「paedagogus」を「教師」と訳した。
- (66) 「parvulus」を「小児」と訳した。
- (67) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (68) 「formator」を「形成者」と訳した。
- (69) 「父の情愛という精神の誘い」。エラスムスは子供に対する父親の情愛を重視している。このような“父の情愛”をもってして、教師は子供に接近していくべきだとエラスムスは考えているのである。
- (70) 『類は類を好む』。Simile gaudet simili。エラスムスがこの“古き諺”を誰の著作からのものとして引用しているのかがよく分からないのだが、これに似た言葉がいくつかある。例えば、ホメロスの『オデュッセイアー』[(下)、呉茂一訳、岩波文庫、1989年]の(XV II. 218)では、「いつだっても、神さまはな、似た者同志をお引き合わせだ」(144ページ)とある。また、プラントンの『パイドロス』[藤沢令夫訳、岩波文庫、1990年]の(240. C)では、「よわい同じからざれば、たのしみも同じからず」とある。また、アリストテレスのニコマコス倫理学 [加藤信郎訳、岩波書店、アリストテレス全集13巻ニコマコス倫理学 (1, 8, a11～a12)、23ページ]には、「大衆にとっては、快いものは互いに撞着しあう」とある。
- (71) 「praeceptor」を「教師」と訳した。
- (72) 「nutrix」を「養育者」と訳した。
- (73) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 2. 28)を参照。
- (74) 「disciplina」を「知識」と訳した。
- (75) 「ある競技者」とは、ミロ [Miro] のことであると思われる。
- (76) 1スタディウムは185メートルほどである。
- (77) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 9. 5)を参照。
- (78) 「literator」を「文法の教師」と訳した。
- ☆☆☆『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』の訳出にあたって  
ここ数年間、“教育とは何か”という根源的

な問いを探求の動機として、私は“教育の誕生”期以前にまで遡って考察を深めようとして来ました。今回もこの探求の動機に基づいて、エラスムスの『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』を訳出することに致しました。エラスムスのこの教育的な著作は、現在の視点からしますと、その内容や表現においてかなり相当に問題を含んだものであります。しかしながら、十六世紀には“教育なるもの”がどのように考えられていたのかを知るための歴史的な資料の一つとしてエラスムスのこの教育的な著作を訳出するという動機から考えますと、エラスムスによって書かれたラテン語の文章を忠実に訳出する方が良いように思われました。それ故に、当訳文におきましては、原典を忠実に訳出しました。出典は、ヨアンネス・クレリクス (Joannes Clericus) の編集による、『Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia・Tomus I』の、ヒルデスハイムのゲオルク・オルムス (Georg Olms) 書店からの復刻版 (1961年)の487～516からであります。

今回発表しました「エラスムス著『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』(翻訳・Ⅳ)」の翻訳におきましては、504. A14. から509. F2.までです<sup>(※)</sup>。なお、(翻訳・Ⅰ)は関西大学教育学会・『教育科学セミナー』第22号(1990年12月発行)に、冒頭部分の487から495. B2.を、(翻訳・Ⅱ)は乳幼児発達研究所・研究紀要(1991年7月発行)に、495. B3.から499. C6.を、また(翻訳・Ⅲ)は、関西大学教育学会・『教育科学セミナー』第23号(1991年12月発行)に、499. C7.から504. A13を掲載させて戴きました。ご参考下さい。

(※) Erasmus, Desiderius, *Declamatio de pueris ad virtutem ac literas liberaliter instituendis idque protinus a nativitate*, Joannes Clericus (Ed), 『Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia』  
・Tomus I, Hildesheim : Georg Olms, 1961. 487-516. [504.A14.-509.F2.].